

中年における家族の介護意識調査

木子 莉瑛・木原 信市・梅木 彰子
澤村 美穂*・下永田いづみ*

Middle-Aged and Elderly People's Concepts about Taking Care of Family Members

Rie KIGO, Shinichi KIHARA, Shoko UMEKI, Miho SAWAMURA and Idumi SHIMONAGATA

The present study was undertaken to investigate the interest in and views of 140 middle-aged and elderly people about taking care of their partners.

On the whole, interest in caring for spouses was high, but about 20% of the subjects had not thought about any need to take care of their spouses. More than 80% of the subjects intended to take advantage of public care-at-home services. Those subjects who did not intend to utilize the public care system tended to express the opinion that utilizing public services or facilities means neglecting one's responsibility or duty. Many respondents thought it was the role of the school system to promote caring for family members. It seems it is a good idea to review the current home and regional education programs, considering that we can learn much from contact and communication with the people, when addressing the issues of an aging society and care for the elderly and infirm.

はじめに

我が国の高齢化は世界でも例がないほど急速に進行しており、高齢化率は平成10年で16%を超え、平均寿命は男性77歳、女性83歳という長寿国の一つとなった。また、核家族化は進行し、高齢者のみの世帯が増加する傾向にある。そのため、寝たきり老人や痴呆老人などの要介護老人の増加が予測されるが、家族や地域の共同生活機能は著しく低下し、家族の介護力のみに頼ることは難しくなりつつある¹⁾。

このような社会変化の中で、政府は1982年に「老人保健法」が制定されたことを始め、1989年には「高齢者保健福祉推進十か年戦略（ゴールドプラン）」が策定され、その実現のために1990年に「老人福祉法」が改正された。さらに、1994年に「新ゴールドプラン」が策定され、2000年4月から公的介護保険が導入されたことなどを取り込み、多様な試みがみられた。しかし、これまで我が国における老人問題に対する対応が家族扶養に偏った私的介護に委ねられ、公的な福祉介護サービスの活用を善しとしない社会的風習が形成されてきた²⁾。そのため、家族で

介護をすることは当然であるという介護意識³⁾が変わりつつあるものの、まだ依然として家族介護の意識が強い状況にある。

平成12年4月から導入された介護保険の被保険者は40歳以上となっており、中年者は自分や家族の健康について意識が高まったことが予想される。そこで本研究は、中年者が自分の配偶者に対する介護についての意識を調査し、対象者の介護への関心・意識及び配偶者の介護に影響する因子などを明らかにすることで、今後の介護支援を考察することを目的とした。

研究方法

1. 調査対象

50歳から64歳までの一般社会人185名のうち有効回答数140名（75.7%）、男性71名（50.7%）、女性69名（49.3%）であった。平均年齢は男性57.1±4.4歳、女性55.9±4.8歳である。

2. 研究方法

質問紙の留め置き調査法によるアンケート調査

3. 調査内容

(1) 対象者の背景について

(2) 配偶者への介護に対する関心と意識

* 熊本大学医学部付属病院

- (3) 対象者の自分への介護に対する意識
 (4) 介護における教育方法
 4. 統計学的有意差の検定は χ^2 検定で行い、危険率 5 % 以下を有意差があるとした。

結 果

対象者の背景において、仕事の有無、対象者の健康に自信の有無及び配偶者の健康状態については、それぞれ表 1 に示す通りである。

1. 配偶者への介護に対する関心

まず、「貴方は配偶者の介護について考えたことがあるか」という設問に対し、「たまに考える」81名(57.9%)で最も多く、次いで「よく考える」31名(22.1%)、「全く考えない」28名(20.0%)であった。性別でみると、男性では配偶者の介護について「たまに考える」と回答した人が37名(52.1%)、「全く考えない」22名(31.0%)、「よく考える」12名(16.9%)の順であったが、女性では「たまに考える」と回答した人が44名(63.8%)、「よく考える」19名(27.5%)、「全く考えない」6名(8.7%)の順であり、「全く考えない」という項目において男性が女性よ

り有意に多かった ($p < 0.05$)。

また、上記の項目において「よく考える」と「たまに考える」を選択した人に対し、介護を考えるきっかけを問いかけた。その結果、最も多く回答したのは「配偶者の健康が悪いとき」と「テレビ、新聞、雑誌などの記事を読んだとき」(記事と略す)がそれぞれ63名(56.3%)であり、次いで「自分の健康が悪いとき」50名(44.6%)、「人から介護について話を聞いたとき」(話を聞くと略す)33名(29.5%)の順であった。性別でみると、男性では「配偶者の健康が悪いとき」32名(65.3%)と最も多く、次いで「記事」28名(57.1%)、「自分の健康が悪いとき」19名(38.8%)であり、女性では「記事」が35名(55.8%)と最も多く、次いで「配偶者の健康が悪い」と「自分の健康が悪い」がそれぞれ31名(49.2%)、「話を聞く」24名(38.1%)であり、「話を聞く」という項目において女性が男性の9名(18.4%)より有意に多かった ($p < 0.05$) (図 1 複数回答)。

さらに、「全く考えない」と選択した人に対し、考えない理由を問いかけた。その結果、最も多く回答したのは「配偶者が健康だから」21名(75.0%)

表 1 対象者の背景

		有	無	どちらとも	計
仕 事	全 体	108 (77.1)	32 (22.9)		140 (100)
	男 性	66 (93.0)	5 (7.0)		71 (100)
	女 性	42 (60.9)	27 (39.1)		69 (100)
対象者の健康	全 体	72 (51.4)	9 (6.4)	59 (42.2)	140 (100)
	男 性	40 (56.3)	2 (2.8)	29 (40.9)	71 (100)
	女 性	32 (46.4)	7 (10.1)	30 (43.5)	69 (100)
配偶者の健康	全 体	90 (64.3)	11 (7.9)	39 (27.8)	140 (100)
	男 性	46 (65.7)	5 (7.1)	19 (27.2)	70 (100)
	女 性	44 (63.8)	6 (8.7)	19 (27.5)	69 (100)

名 (%)

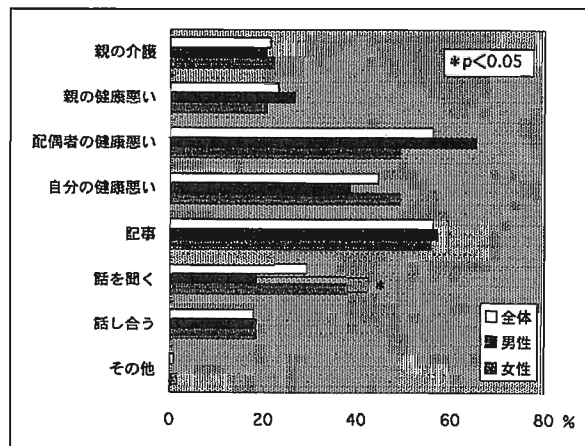


図 1 配偶者の介護を考えるきっかけ

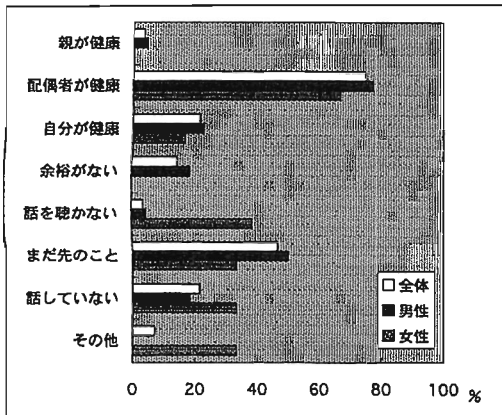


図2 配偶者の介護を考えない理由

で、次いで「まだ先のことから」13名(46.4%)、「自分が健康だから」と「配偶者と話し合ったことがないから」がそれぞれ6名(21.4%)であった。性別でみると、男性では「配偶者が健康だから」17名(77.3%)、「まだ先のことから」11名(50.0%)、「自分が健康だから」5名(22.7%)であり、女性では「配偶者が健康だから」4名(66.7%)、「まだ先のことから」と「配偶者と話し合ったことがないから」がそれぞれ2名(33.3%)であり、男女間に有意な差はみられなかった(図2 複数回答)。

2. 配偶者への介護意識

1) 配偶者の介護に影響する因子

まず、「もし貴方の配偶者がベッド上での食事や排泄の援助が必要となった場合、配偶者を介護しようと思う理由を3項目以内に選んでください」という設問に対し、全体では最も多く選択したのが「配偶者の介護をするのは当然と思うから」(義務感と略す)117名(83.6%)で、次いで「配偶者を愛している、大切に思うから」(愛情と略す)と「自分以外に介護する人がいないから」(自分だけと略す)がそれぞれ78名(55.7%)、「介護が必要となった配偶者がかわいそうに思うから」(憐れみと略す)35名(25.0%)であった。性別でみると、男性では「義務感」62名(87.3%)と最も多く、次いで「愛情」44名(62.0%)、「自分だけ」36名(50.7%)であり、女性では「義務感」55名(79.7%)と最も多く、次いで「自分だけ」42名(60.9%)、「愛情」34名(49.3%)であり、男女間の順位に違いはみられたが、有意差はなかった(図3 複数回答)。

次に、「もし貴方の配偶者がベッド上での食事や排泄の援助が必要となった場合、配偶者を介護しよ

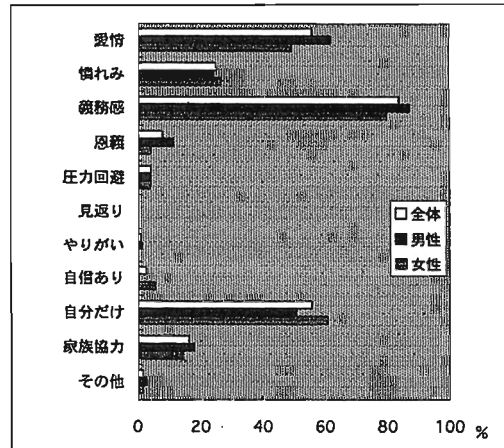


図3 配偶者の介護をしようとする理由

うとする際に妨げとなる理由を3項目以内に選んでください」という設問に対し、全体では最も多く選択したのが「時間が自由に使えないから」(自由の拘束と略す)57名(40.0%)で、次いで「いつも気にかけていなければいけないから」(精神的負担と略す)と「介護の知識・技術面で自信がないから」(自信ないと略す)がそれぞれ49名(39.5%)、「経済的に苦しくなるから」(経済的負担と略す)36名(25.7%)であった。性別でみると、男性では「自由の拘束」31名(43.7%)と最も多く、次いで「自信ない」28名(39.4%)、「精神的負担」と「家事・炊事・洗濯など不得意だから」(家事不得意と略す)がそれぞれ24名(33.8%)であり、女性では「自由の拘束」26名(37.7%)と最も多く、次いで「精神的負

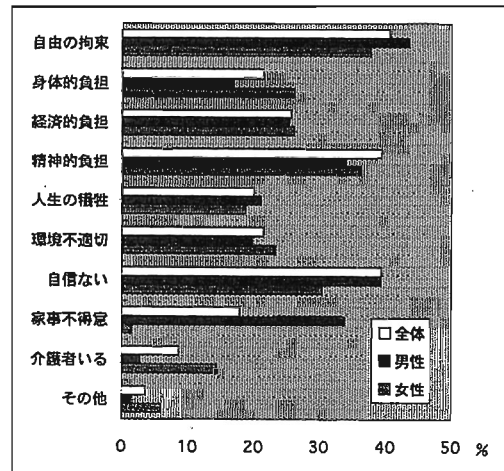


図4 配偶者の介護を妨げる理由

担」25名(36.2%),「自信ない」21名(30.4%)であり,男女間に有意差はみられなかった(図4 複数回答)。

2) 配偶者への介護方法

まず,「もし貴方の配偶者がベッド上での食事や排泄の援助が必要となった場合,どのような介護を考えるのか」という設問に対し,最も多く選んだのは「介護サービスを利用しながら家で介護をしていきたい」(サービスありで家と略す)が113名(80.7%)で,次いで「特別養護老人ホームや老人保健施設などに入所してもらおうと思う」(施設と略す)14名(10.0%),「介護サービスを利用せず家で介護をしていきたい」(サービスなしで家と略す)11名(7.9%),「その他」2名(1.4%)の順であった。性別でみると,男性では「サービスありで家」56名(78.9%),「サービスなしで家」8名(11.3%),「施設」6名(8.5%),「その他」1名(1.4%)であり,女性では「サービスありで家」57名(86.2%),「施設」8名(11.6%),「サービスなしで家」3名(4.3%),「その他」1名(1.4%)であり,男女間においては順位の違いがみられた。

次に,「サービスありで家」を選択した人において,「施設でなく家で介護していきたいと思う理由は何か」との質問に対し,「配偶者が望んでいるから」(望んでいると略す)82名(72.6%)と最も多く,「他人まかせで配偶者を見捨てたような気がするから」(見捨てた気と略す)41名(36.3%),「近くに居たいから」(近くに居たいと略す)32名(28.3%),「施設の利用料金が高額そうだから」(施設料金が高いと略す)14名(12.4%)の順であった。性別にお

いては,男性では「望んでいる」43名(78.8%)と最も多く,「見捨てた気」24名(42.9%),「近くに居たい」14名(25.0%)であったが,女性では「望んでいる」39名(68.4%)と最も多く,「近くに居たい」18名(31.6%),「見捨てた気」17名(29.8%)であり,男女間においては順位の違いがみられた(図5 複数回答)。

「施設」と答えた人においては,「家でなく施設などに入所してもらい介護していくと思う理由は何か」との質問に対し,「自分の仕事,生きがいが犠牲になるから」(人生設計の犠牲と略す)7名(50.7%)が最も多く,「時間が自由に使えないから」(自由の拘束と略す)と「施設でも行き届いた介護がなされていそうだから」(行き届いた介護と略す)が5名(35.7%),「環境(家の構造上)が整っていないから」(環境の不適切と略す)4名(28.6%)であった。

「サービスなしで家」と答えた人においては,「介護するにあたり介護サービスを利用しないと思う理由は何か」と質問した。それに対し,「見捨てた気」が8名(72.7%)と最も多く,「自分や家族の力で十分介護していけると思うから」(十分介護できると略す)7名(63.6%),「他人が家に入るのが嫌だから」(他人に入られたくないと略す)6名(54.5%)であった。

3. 対象者自身への介護に対する意識

「今,あなたが寝たきりとなり,ベッド上での食事や排泄の援助が必要になったとする。あなたは,自分の介護についてどう思うか。」の問いに対し,「サービスありで家」と答えた人は89名(63.6%)と

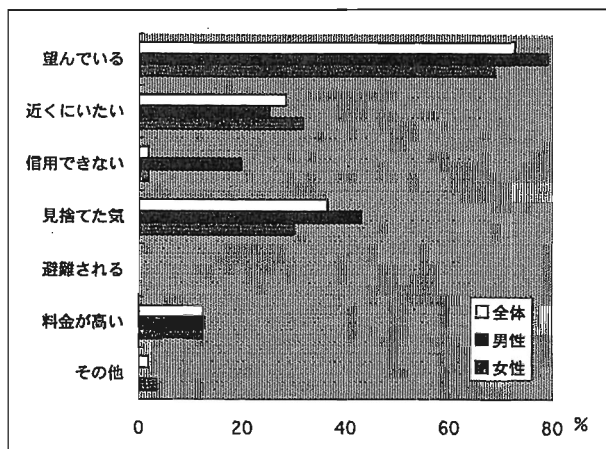


図5 「サービスあり家」を選択した理由

最も多く、「施設」37名(26.4%)、「サービスなしで家」12名(8.6%)、「その他」2名(1.4%)であった。性別においては、男性では「サービスありで家」51名(71.8%)、「サービスなしで家」10名(14.1%)、「施設」9名(12.7%)であり、女性では「サービスありで家」38名(55.1%)、「施設」28名(40.6%)、「サービスなしで家」2名(2.9%)であり、女性は男性に比べて「施設」が有意に多かった($p < 0.05$)。

4. 介護の教育について

「今後さらに高齢化が進むと予測されるが、介護に対する教育はどのように行われると良いと思われるか」の問いに対し、「小学校、中学校、高等学校の授業の中で教育していくべきだと思う」「学校教育と略す」と答えた人は98名(70.0%)、「地域社会の中で大人が子ども達に伝えていくべきだと思う」「地域教育と略す」25名(17.9%)、「祖父母や親を中心として家庭で教えていくべきだと思う」「家庭教育と略す」9名(6.4%)、「新聞、本、テレビなどの情報で十分だと思う」「情報教育と略す」2名(1.4%)、「教育無し」と答えた人は1名(0.7%)、「その他」と答えた人は5名(3.6%)であった。性別ではほとんど差はみられなかった。

考 察

1. 配偶者への介護関心

今回の調査では、配偶者の介護について8割の人が考えており、考えるきっかけとして過半数の人が「配偶者の健康が悪いとき」、新聞や雑誌などの「記事」を読んだときと回答している。これは身体機能の衰えを自覚する中高年期での配偶者の不健康は今後配偶者への介護が必要になったときのことを考える機会になっていると考えられる。また、平成12年から介護保険が導入されるため、マスコミによる介護関連の報道が多くなり、被保険者として情報を得る中で配偶者の介護について考えることに影響を与えている要因と思われる。性別では「人から介護について話を聞いたとき」においては女性が男性より2割弱有意に多かった。厚生省の指標によると、50～69歳の人で介護を経験した者は56.5%であり、また、全介護者の84.4%を女性が占めており、中高年の女性は介護に携わっている割合が高い¹⁾。そのため、介護に関する話を同年代の介護を行っている人から聞く機会も多い結果と考えられる。

一方、配偶者の介護について2割の人が全く考えておらず、その理由として「配偶者が健康だから」と「まだ先のことから」が最も多かった。今回、

調査を行った対象者は中高年層であり身体機能の衰えを自覚する時期であるものの、病気等で自覚症状が急速に現れるのは65歳を超えてからである²⁾。このことから、配偶者が健康である割合が高く、介護について全く考えない理由となっており、介護について「まだ先のこと」と考えていると思われる。性別においては、男性に配偶者の介護を考えない人が有意に多く、その理由として「余裕がない」、「先のこと」、「配偶者が健康」などの項目が多かった。厚生統計協会の調査で中高年の日常生活での不安は、男性では「仕事」が多いのに対し、女性では「自分の健康」が多いとある³⁾。このことが配偶者の介護を全く考えない男女間の差へとつながっていると考えられる。

2. 配偶者への介護意識

1) 配偶者の介護に影響する因子

配偶者に介護が必要になった場合に介護をしようと思う理由として、介護することへの「義務感」が最も強く、次いで配偶者に対しての「愛情」、介護する人が「自分しかいない」が多く挙げられた。50歳代の家庭の役割に関する意識調査によると「互いに助け合う、支え合う場」が男女とも一番高くなっている⁴⁾。このことから同様に「介護は家族の義務である」という我が国の「義務感」を重視するという国民性を反映し、配偶者の介護を家庭の役割として捉えていると考えられる。

また、配偶者に介護が必要となった場合、介護を妨げる理由として「自由の拘束」、「精神的負担」、「自信なし」、「経済的負担」が多く挙げられた。実際に介護を行っている人を対象とした調査では、「世話の負担が大きい」、「外出できない」、「精神的負担」などの心身両面において極めて負担が大きくなっており⁵⁾、配偶者の介護を行っていない人を対象とした本結果でも同様な傾向にあった。但し、本結果は「自由の拘束」が「身体的負担」より重視されているのに対して、実際に介護を行っている人を対象とした調査では、「身体的負担」が「自由の拘束」より重視されている。このことは、中高年者が予想している以上に介護が身体的な負担となっていることが考えられる。性別においては、男性が女性より「家事が不得意」という項目を多く選択した。このことは、これまで男女の役割分担として女性が家事を担うことが多く、家事において男女間に力量の差がみられることによるものと思われる。

2) 配偶者への介護方法

配偶者への介護方法においては在宅希望者が9割

弱、施設希望者が1割であった。在宅希望者のうち、9割がヘルパーやデイサービス等の介護サービスを利用したいと考えている。本研究の対象者となっている50～64歳の人は祖父母の介護をしている親の姿を見て育ったり、現在親の介護に携わっている世代であり、介護することがいかに困難で負担となるものかを身をもって経験している人が多いと思われる。サービスを有効に利用することは、家族の負担の軽減につながることからサービスを利用しながら介護することに抵抗感は少なくなっていると思われる。また、「サービスなしで家」と「サービスありで家」などの在宅介護希望者が介護場所として家を選ぶ理由として、「配偶者が望んでいる」が最も多く、次いで配偶者を「見捨てた気」、配偶者の「近くに居たい」が多かった。配偶者に介護が必要になったと仮定したとき、在宅での介護を希望した場合、介護者の意向（「近くに居たい」）や体裁（「見捨てた気」「非難されそう」）より被介護者の希望を優先して介護方法を考える傾向にあると思われる。

一方、施設希望者が介護場所として「施設」を選ぶ理由として「人生設計の犠牲」が最も多く、次いで「自由の拘束」、「行き届いた介護」、「環境の不適切」が多かった。退院前の要介護者をもつ介護者を対象にした調査では、在宅希望群より施設希望群の方が「時間的ゆとり」が少ないと報告されている³⁾。本研究でも「人生設計の犠牲」、「自由の拘束」という時間的拘束の軽減のために施設を利用する傾向がみられた。

さらに、サービスを利用しない理由としては、「見捨てた気」72.7%で最も多く、次いで「十分介護できる」、「他人に入られたくない」などが5割を超えていた。昔は在宅で家族の介護をするのは当然であった。それを見て育ち在宅での介護が当然と思っている人にとっては、サービスや施設を利用することは家族としての責任・義務の放棄であると感じていると思われる。このことから「見捨てた気」の選択率が高かったと考えられる。

3. 自分への介護方法

自分への介護方法においては、「サービスありで家」6割強で最も多く、次いで「施設」であり、在宅介護サービスや介護施設の利用意向は高かった。性別では、女性の方が「施設」と回答した人が多く、有意な差がみられた。50～60歳代の人は祖父母の介護をしている親の姿を見て育ったり、現在親の介護をしている世代であり、これまで介護に関わってきた経験から介護が家族の負担となることを知ってい

ると思われる。また、従来の介護は、妻や長男の嫁といった女性が担い手となることが多く、家族の負担の上に成り立っていた。このことから女性は男性に比べ、自分の介護では家族の負担にならないように施設に入所するという回答が多く、サービスを利用せずに家で介護して欲しいという回答が少なかったと思われる。

4. 介護の教育

今後の介護に対する教育として「学校教育」が7割で最も多く、次いで「地域教育」となっている。近年、三世帯世帯は減少し、核家族世帯は増加傾向にあり、介護に関することに限らず、祖父母から長年にわたって培ってきた知識や体験を伝授してもらったりすることは少なくなっている。また、現在は地域とのかかわりやふれあいは希薄になっている。このようなことから、従来は教育の場であった家庭や地域に対して介護の教育の期待は低く、学校での教育に期待が高まっていると思われる。学校では従来から児童生徒の発達段階に応じ、社会科・道徳等で福祉の重要性や思いやりの心を育てることなどの指導が行われている。保健・医療・福祉の分野においては、10年程前から高齢社会教育に関する専門教育は行われているが、小・中学校では1つの教科として確立はされていない。しかし、次世代を担う子どもたちに高齢社会に対して考える機会や知識を与えることは重要である。このような人々の期待や関心に応えるには、教育者自身が高齢社会に関して興味を持ち、福祉の活動に参加していくことも必要であるし、また、高齢社会や介護の問題が人と触れあひから学ぶことも多いことから、家庭・地域教育を見直す必要もあると思われる。

結 論

1. 配偶者の介護を「よく考える」と「たまに考える」と合わせて、8割の人が配偶者への介護について考えていた。そのきっかけとして「配偶者の健康が悪いとき」、「介護についての記事を読んだとき」が多く挙げられた。また、性別では「周知から介護の話を聞くと」と回答した人は女性が男性より有意に多かった ($p < 0.05$)。
2. 配偶者の介護を「全く考えない」人は2割であり、男性は女性より多かった。その理由として「配偶者が健康だから」が最も多く挙げられた。
3. 配偶者に介護が必要となった場合、介護しようという理由として「介護するのは当然」、「配偶者への愛情」、「介護する人が自分しかいない」とい

う順に多かった。逆に、介護を妨げる理由として「時間が自由に使えない」、「精神的負担」、「自信がない」が多かった。

4. 配偶者の介護方法では「介護サービスを利用して家で介護したい」と選択した人が8割弱で最も多かった。その理由として、「配偶者が望んでいる」、「見捨てた気」が多かった。
5. 対象者に介護が必要となった場合、対象者が望む自分への介護方法は「サービスありで家」63.6%、「施設」26.4%であり、特に「施設」を望む人は女性の方が男性より有意に多かった($p < 0.05$)。
6. 今後の介護に対する教育は核家族の増加や地域との希薄化から「学校教育」への期待が高まっている傾向がある。

文 献

- 1) 齋藤ゆか：家族の介護意識はどうつくられるか，生活経営学研究，No. 34，p 52～54，1999.
- 2) 渡辺武雄：高齢化社会における介護意識をめぐる課題～介護講座受講者調査に学ぶもの～，京都勤労者学園調査・研究 *vita futura*, V. 7 p24～29, 2000.
- 3) 藤崎宏子：「高齢者・家族・社会的ネットワーク」現代家族問題シリーズ4，培風館，1998.
- 4) 厚生統計協会：厚生指標，46(10)，p 54～56，1999.
- 5) 厚生統計協会：国民衛生の動向，臨時増刊46(9)，p78，1999.
- 6) 厚生省組：厚生白書，p 8～9，1997.
- 7) 裏山八重子：在宅ケアにおける介護者負担と社会資源の利用に関する検討，第24回日本看護学会集録（地域看護），p 98～101，1993.
- 8) 中村みさ他：退院前の高齢患者の家族の介護力実態調査，第27回看護学会集録（地域看護），p 92～95，1996.